

頌古

## 第八則 三界無法

白田 劫石

垂示に云く、従上の祖師、堂閣の巖麗を好まず、多衆のどうねつ 鬧熱を誇らず、茅茨石室ぼうし、折脚鐘内に野菜根を煮て喫して日を過ごし、一句子の話を留め得て後昆こうこんを悩害して、仏祖の深恩を報答せんと欲す。故に片言を出すことは、大火聚の如く、隻字を吐くことは生鉄櫪しょうてつけつに似たり。

本則は、盤山ぼうしやく宝積禅師の有名な「三界無法」であるが、白隱老漢は、本則の垂示において、禅師の無雑作な一語が、如是法を体現するもので、いかにも手をつけることのできない一団の大火聚の如く、また一条の鉄の塊りの如くで、到底齒のたたない悪毒の語である旨を示す。

この「垂示」の初めの句は、ご承知のように大灯国師の次の遺誠からとられたものである。

「老僧行脚の後、或いは寺門繁興、仏閣経巻に金銀をちりば 鏤め、多衆鬧熱、或いは誦経諷呪 長坐不臥 一食ぼうさい 卯齋 六時行道、たとえ恚麼くざいにし去ると雖も、仏祖不伝の妙道を以て胸間に掛在せずんば、則ち因果を撥無し真風地に墮みなつ。併是れ邪魔の種族なり。老僧世を去ること久しくとも、児孫と称することを許さず。

或いはもし一人あり、野外に綿蕪し、一把茅底、折脚鐘内に野菜根を煮て喫して日を過すとも、専一に己事を究明する者は、老僧と

日日相見、報恩底の人なり。誰か敢て輕忽せんや、勉旃勉旃！」

この遺誠は、いうまでもなく祖師禪に参ずる学人の基本の心構えを示されたものであり、時代の新旧を問わず洋の東西を問わず、一貫して不易な千古不磨の警勅である。

学人が、もしこの誠めに違背して、第二義第三義底の世間の名利に墮するならば、法は将来必ず亡びる。

多衆鬧熱や、堂閣の嚴麗を不可とするのではない。世間底に墮して、根本の第一義を打失するのが問題なのである。

世の禅ブームに乗って寄り集まる者は、純一の道心に根ざしていないが故に、如是法を体得し、ホンモノの禅者となることはできない。熱がさめれば去ってゆく。

本格の修行を志す者は、この遺誠をしっかりと基本に据えねばならない。

そのような修行者にとっては、如是法そのものを体現する仏祖師の一言半句は、それに近づけば面門を燎却され、これを口に入れば呑みこむことも吐き出すこともできない大火聚の如く、生鉄槩の如くで、推量によって意根下にト度すれば、まさに髑髏前に鬼をみる有様となる。

何故そうかといえ、それは学人の命根を坐断する悪毒の語であり、それによって初めて人我の見が殺し尽されるからである。

この人我の見が殺し尽くされなければ、大死一番絶後に再蘇して、本来の面目に帰り如是法を悟得することはできない。

これは時代の相違や社会の別を超えて、一貫して変ることのない不易の道理である。

そしてそのためには、修行の基本にまずこの遺誠の道心を据えねばならない。

さて真正の学人ならば、本則に示される盤山宝積禅師の一語に対して、いささかの私念にわたらず、工夫三昧に入って、その生鉄槩

を噛み破り、掌を見るが如くその真面目を手に入れてもらいたいものである。

こう言って、本則を喚び起こした。

拳す、盤山 垂語して云く、三界無法何れの処にか心を求めん！

盤山宝積禅師は、馬祖道一禅師の法を嗣いだ方で、次のような悟道の因縁が伝えられている。

盤山が市街で托鉢していたときのこと、肉屋の店で客が肉を買うのに、精底<sup>さ</sup>一片を割き来れ（極上の肉を一片下さい）といった。

これに対して肉屋の主人は、那箇かこれ精底ならざる！（うちには極上でない肉など一片もないわい）と答えた。

盤山は、これを聞いて、ウン、なるほど！ と入処があった。

元来、この尽十方法界には、兔の毛の先ほどの混り気などはない。清浄法身じゃ。

その後、葬儀において棺が担ぎ出されるとき、僧が鈴を振りながら、紅輪（夕日）決定して西に沈み去る。いぶかし魂霊何れの処にか往く？ というのを聞いて、父を失った子が おい！おい！ と声を出して哭するのを見て大悟した。

さてこの盤山宝積禅師のあるときの垂語に云く、「三界無法 何れの処にか心を求めん！」

この垂語には、実は後がある。

「四大もと空、仏 何にか依住せん。北斗 動ぜず、寂止して痕なし。覲面<sup>てきめん</sup>に相呈す、更に余事なし。」

本則は、この後の語をすべて切り捨てた。ややもすると、語について法理にわたり、玄旨を失却しかねないからである。

「三界無法、何れの処にか心を求めん！」これだけでよい。

この一語、垂示にあったように、大火聚の如くで、一言半句の弁をつけ、推量分別にわたったら、ものそのものを取り逃してしまう。

面前これ何ぞ？ 有法か？ 無法か？ と疑い来り疑い去って、工夫三昧に入って蒲団上で絶し切らねばならぬ。兔の毛の先ほどの悟解の念慮が入ると、得入することはできない。

円悟禅師は、『碧巖集』の本則に下語して【箭 既に弦を離れて返回の勢無し】とおき、また【声に和して便ち打たん】とおく。まさに本流度刃で、電転じ星飛ぶ勢があり、擬議や尋思にわたれば、敗欠了也である。言葉についてチラッと心中に何かが浮かべば、早や真理は三千里外に飛び去っている。

「無法」というのは、無事であり無為であるとなす底は、鬼窟裡に入って金鎖の難に遇う。

白隠老漢は、ここに下語して【我が弟子大阿羅漢は、此の義を解すること能わず。只大菩薩衆のみ有って、<sup>まさ</sup> 応に此の義を解すべし】とおく。

この語は、『七賢女経』にあり、次のような因縁がある。

「姉妹同じく屍陀林に遊ぶ。一女、屍を指して曰く、屍這裏に在り、此の人何れの処にか去る？ 一姉、叱して云く、<sup>そも</sup> 作麼？ 作麼？ 諸の姉妹、悉く悟道す」

帝釈天は、これを見て讚嘆し、供養を申し出たのに対して、女は、三般の物を求めた。三般の物とは、無根樹 一株、無陰陽の地 一片、叫んで応えざる谷 一所である。帝釈天は窮した。

「女云く、汝もし此 無くんば、<sup>しか</sup> 争でか人を<sup>すく</sup> 済うを解せん。」帝釈天は、この旨を仏に告げた。「仏云く、我が諸の弟子、此の義を解せず。唯菩薩のみ有って、乃ち此の義を解す。」羅漢とは、「無学」と訳され、学ぶべきものの一物もない境涯である。「三界無法」は、この羅漢では見ることができない。衆生済度のために、最後の金鎖をたち切る利他心がないのである。未だ無学の鬼窟裡に腰を据えている。

まさに【声に和して便ち打たん】で、「三界無法」の「三」の字

が口から出ない以前に、三十棒である。

まことに法を識る者は、法を懼れると言わねばならない。

下語。【相罵ることは、爾に饒す嘴を接げ、相唾することは、爾に饒す水を潑げ】こればかりは何としても届かぬ。

頌に曰く

千峰雨霽れて露光<sup>さむ</sup>冷し

月は落つ松根蘿屋の前

等閑に此の時の意を写さんと擬すれば

一溪 雲鎖<sup>とざ</sup>して水潺<sup>せんせん</sup>潺

この頌は、講釈をしようにも手のほどこしようがない。ただ吟じ来り、吟じ去って、ひとり味わうのみである。

白隠老漢は、「評」で次の如く述べておられる。

「此の頌、全篇 一団の大火聚の如く、一条の熱鉄槩に似たり。如何んが手脚をつけん。誰か知る、国師も亦頌じ得て喪身失命し、盤山も亦説き得て喪身失命し了ることを。

学者、もしこの頌を見得して、掌を指すが如くならば、盤山を見ること、掌を指すが如くならん。盤山を見ること、掌を指すが如くならば、国師を見ること、掌を指すが如くならん。」

ここは、もう言葉や思量は届かぬ。

千峰雨霽れて露光冷し

雨の晴れ上がった千峰万峰の露光のすさまじい絶景の只中で、雲にとざされた溪流のせんせんとる水音に全心身ひたり切るばかりである。

ここでは「三界無法」などという言葉は絶する。露光のすさまじさと、溪流の音に寒毛し卓豎するのみ。

下語。【君看よ、双眼の色、語らざれば愁いなきに似たり】この絶景に感極まって、ウーンとうなるより仕方がないが、その言葉の

絶しはてたところに、深い愁いがこめられている。

しかしこの思いは、ただ孤り自分だけが知るのみで、他に語ることはできない。しかしまた言葉がないからといって黙っていたのでは、愁いがないように思われるというのである。

この「愁い」とは、何の愁いなのであろうか？

月は落つ松根蘿屋の前

下語。【眼中に見刺無く、耳裏に聞塵を絶す】眼裏、耳裏、瀟洒絶！ 私念のかけら、塵のかけらも見当らない。瀟洒を絶している。「月は落つ」で、眼界はすべて絶し切られた。この真っ暗のさ中に、尽十方の世界がその真実相の扉を開く。すべての音の途絶えたここに、存在は断腸の秘曲を奏でる。

等閑に此の時の意を写さんと擬すれば

下語。【若し琴中の趣を識らば、何ぞ絃上に声を勞せん】「琴中の趣」とは、琴を弾く人の心の悲しみであり、愁いである。

それがホントーに分かっている人には、わざわざ絃を動かして音を出すの要はない。奏でられた音によって、その消息を知ろうとすれば、かえって遠ざかるばかりである。

ただ黙っていた方がよい。言葉は、ここでは不要である。

如来の広長舌というものは、そのようなものである。その清浄身とは、そのようなものである。

こう言って、最後の結句を喚び起こした。

一溪 雲鎖して水潺湲

この下語。【嫌うこと莫れ、襟上斑々色。是れ妾が灯前に、涙を滴したたらして縫いしところなり】これは、家を離れて出征した兵士が、着物の襟の斑のしみを見て、遠く妻がそれを縫ったときの悲しみを知る心を詠んだものである。

この絶景である如是法のすがたには、一点一劃の添えようも減じようもない。「不生不滅」の言葉も届かない。

ところが番々出世の祖師方は、やれ提唱じゃ、公案じゃと、この折角の絶妙な法に疵をつけている。

この愁いや悲しみは、知る人ぞ知るで、同床に臥した者でないと、この入り組みは見るができない。

盤山宝積禅師が、「三界無法、何れの処にか心を求めん」といい、大灯国師がそれを頌じて、このような偈をおかれる。その肚裏には、このような折角の法を汚す悲しみが込められている。この下語は、このような笑うに堪え、悲しむに堪えたる仏々祖々の法の、被底の穿たるる有様を示したものである。

しかしまたその不風流なところに、玄々微妙な「也風流」の味わいがある。

この下語は、「三界無法」の則の宗旨を、グーンと向上底にまで高めて置かれたもので、白隠老漢の肚は、ここまで見えなければ、この則の玄旨は明らめることはできないというのである。

ここではじめて、盤山宝積禅師に相見でき、また大灯国師に相見できるというものである。

祖師禅が、的々相承の慧命を伝えて、世界の宗教の中で冠絶した最高峰の境涯や見地を示す所以は、正にこの一著子にあると言ってよい。

さてなにはともあれ、このすさまじい潺潺たる水声をこの目でしかと見てみよ！

ザーザーザーザーザー……

#### 著者プロフィール



白田劫石ごつせき（本名／貴郎）

大正4年、東京生まれ。東京帝国大学倫理学科卒業。元千葉大学名誉教授。昭和11年、両忘協会立田英山老師に入門。人間禅教団第三世総裁・師家。庵号／磨<sup>ま</sup>甌<sup>せ</sup>庵。平成21年2月帰寂。